

ペリー提督来航 150 年記念稀観書展示会

『ペリーがやって来た！ 黒船来航と日本』への いざない

奥 正敬

今年アメリカのペリー提督 (Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) が、1853 (嘉永6) 年6月3日 (太陰暦、以下国内のできごとは同暦で示す) に浦賀へ来航して150年になります。

今に残る有名な狂歌「泰平の眠りをさます上喜撰 (蒸気船) たった四はい (四隻) で夜もねられず」の文脈からは、強いペリーと徳川幕府や民衆の慌てふためく様子が見事に伝わってきます。しかし、本学図書館に所蔵された当時の資料を見ていると、けっして、このような姿ばかりではなく、冷静に現実を捉えて対応していた人々がいたことを教えてください。

ペリー来航前の東アジア情勢

この時代の東アジアの情勢は、中国が1840年から1842年にかけてイギリスと戦ったアヘン戦争の結果、南京条約によって広州・福州・厦門・寧波・上海の5港を開港させられ、香港もイギリスに割譲していました。また、フランスやアメリカ等の欧米の列強諸国が、あいついで中国に進出して中国の人たちと摩擦を起こすなど、激動の真っ只中にありました。

幕府の海外情報収集媒体である『風説書』

徳川幕府は鎖国体制をとりながらも、毎年新しく赴任して来るオランダ商館長が、海外情報を書き込んで提出する『風説書』や1842 (天保8) 年以降に提出を求めた、より詳しい内容の『別段風説書』によって、世界や東アジアの情勢を把握していました。また、中国船からの『唐船風説書』ではアヘン戦争の結末を知らせています。

さらに、幕府は1844 (弘化元) 年にオランダ国王ウィルヘルムII世からの国書で開国を勧められ、これを断っていることから、東アジアと日本を取り巻く環境は十分に理解していたと思われます。

幕府の強硬姿勢と
アメリカ船の退去

それにも拘わらず、幕府は異国船打ち払い令のもとに、度々現れる外国の船舶を退去させています。アメリカ船では、1846 (弘化3) 年に開国を求める使節として黒船2隻で来航したピッドル提督を強硬に退去させ、この前後には幾度か来航したアメリカ船を追返すなど、あくまでも鎖国体制を守り通そうとしています。



マシュー・C・ペリー提督

アメリカ国内の情勢

この頃、アメリカは米墨戦争 (1846-1848) の勝利でカリフォルニアを併合し、太平洋に面する領土が拡張されていました。また、蒸気船の発達で、太平洋岸を出航して18日から20日程度で東アジアに到着できるようになり、中国貿易や捕鯨業に好影響を与えていました。

こうした状況を背景に、産業界で補給・中継基地として日本の港湾利用を求める声が高まりをみせ、議会決議に基づきフィルモア第13代大統領からペリーに対し、日本遠征の命令が下されたのでした。

ペリーが研究した「日本学」

ペリーは日本遠征に先立ち、かつて長崎の出島に滞在したオランダ東インド会社の人たちが、帰国後刊行していた日本研究書を中心にして、細かな日本研究を行っています。その内容は地理、歴史、政治、経済、文化など幅広いもので、この研究で知り得た知識は幕府との交渉で遺憾無く生かされ、後に『日本遠征記』の中で研究の成果を詳述しています。

ペリーの浦賀来航と大統領親書の受理

このように事前研究を充分に行ったペリーは、ピッドル提督の来日から7年後の1853 (嘉永6) 年6月3日に、黒船4隻を率いて浦賀に来航したのです。日本人の交渉術を知っていたペリーは、長崎への回航を指示する幕府に対して、江戸でのフィルモア大統